

第6室(書跡)

「古代インドと日本の古経典」展示解説

N-8-1 梵本心経並びに尊勝陀羅尼 (ぼんぼんしんぎょうならびにそんしょうだらに)

ターラ樹の葉を乾燥させ、両端を切り、横に界線の罫(けい)をほどこし、「般若心経」と「仏頂尊勝陀羅尼」を梵字で記した貝葉経(ばいようきょう)です。古代インドでは、紙が定着する以前に、ターラ樹の葉を用いた貝葉写本が盛行しました。この貝葉経は、最も古い部類に属するものとして重要視されます。

N-8附属 訳経記 (やくきょうき)

江戸・湯島に靈雲寺を開いた真言宗の僧である浄厳(じょうごん、1639～1702)は、悉曇(しつたん、梵字・梵語に関する学問)学者として知られ、梵学に優れていました。この訳経記は、元禄7年(1694)に、浄厳が法隆寺伝来の梵字の貝葉経(ばいようきょう)二葉、「般若心経」と「仏頂尊勝陀羅尼」を写しとり、朱点や句義を注記し、あわせてあとがきを書き記したものです。

N-14 仏名経 (ぶつみょうきょう)

『仏名経』は過去のあやまちを悔い改め、念仏の力で罪を滅ぼすために、諸仏の名号を受け入れて覚えておくことを説いた経典です。この仏名経は過去、現在、未来の3巻に構成され、それぞれ千の仏名をあげています。各巻の奥書により、永治元年(1141)に五師隆慶(ごしりゅうけい)が先師・林幸大師(りんこうたいし)の一周忌を供養し、同時に仏名会(ぶつみょうえ)を催して、この経を施入したことがわかります。

N-11 賢愚経断簡 (大聖武) (けんぐきょうだんかん おおじょうむ)

この写経は、13巻本『賢愚経』巻第五の沙弥守戒自殺品第二十三に相当する断簡です。筆者は聖武天皇と伝えますが自筆ではありません。写経のなかで最も雄大かつ力強い書風で、“大聖武”の異名があります。

N14-1 仏名経（ぶつみょうきょう）

『仏名経』は過去のあやまちを悔い改め、念仏の力で罪を滅ぼすために、諸仏の名号を受け入れて覚えておくことを説いた経典で、菩提流支訳の12巻本がよく知られています。この仏名経は過去、現在、未来の3巻に構成され、それぞれ千の仏名をあげています。各巻の奥書により、永治元年（1141）に五師隆慶が先師林幸大師の一周忌を供養し、同時に仏名会を催して、この経を施入したことがわかります。

第6室 染織 様々な技法の染織品

今回の染織展示は聖武天皇の帯と伝えられる玉帯残欠を中心として、さまざまな技法で作られた作品を展示しました。飛鳥から奈良時代に花開いた染織芸術の多様な展開をご覧ください。

N-49：玉帯残欠（ぎょくたいざんけつ）

多彩な色糸を濃い色から淡い色へとぼかした暈縞（うんげん）風に配列し、襷文を表わした帯。法隆寺では聖武天皇の玉帯と伝えられる。注目すべきは、さまざまな色のガラス玉と真珠玉とを前もって組み糸に通してから組んでいる点。こうした例は正倉院の組紐にはみられない大変珍しいもので、高貴な人物が身につけたものだろう。

N-50-1：山形文組紐幡頭（やまがたもんくみひもばんとう）

仏事に使われた絹製幡（きぬせいばん）の残欠で、幡の上方の幡頭（ばんとう）部分。組紐は、数々の色糸を用いて二条軸一間組（にじょうじくいつけんぐみ）という技法で山形文（または矢羽文）を表わす。

N-319-14：平絹・綾幡足残欠（へいけん・あやばんそくざんけつ）

幡身の縁下端と4条の幡足をのこした残欠。赤紫地綾と各色の平絹からなる。

N-319-34：平絹幡残欠（へいけんばんざんけつ）

幡身の下端と幡足の上部などを残した残欠。黄色い幡は死者の追善に用いられた。

I-336-3a：茶地蝶文描絵平絹〈東院〉銘（ちゃじちょうもんかきえへいけん）

带状の残欠。茶地平絹に墨を用い、描絵で2種類の姿態の蝶と間地に雲文をあらわす。一方の蝶は羽を広げた状態を真上から、他方は横からみた姿をあらわす。

I-336-4：黄地小円花文金銀摺絵羅（きじしょうえんかもんきんぎんすりえのら）

細やかに斜め格子状の襷文（たすきもん）を織り出した羅（黄地襷文羅）に金泥・銀泥を用いて六弁の小円花文を摺りあらわしている。残欠ながら、かわいらしい印象を伝える。

N-319-46：紺地香炉燭台文綾幡足残欠

（こんじこうろしょくだいもんあやばんそくざんけつ）

きわめて濃い紺色の幡足残欠。「香炉燭台文」と呼ばれるものの、何を表しているのか謎の多い文様である。

N-319-52-2：淡縹地平絹幡足残欠（うすはなだじへいけんばんそくざんけつ）

藍は染め方とその回数により、色彩にさまざまな表情を見せる。この平絹幡足残欠はごく薄い藍染で仕上げられており、一見単純そうに見えて奥深い染物の世界を教えてくれる。

I-336-93：縞地竜文刺繍（しまじりゅうもんししゅう）

色糸用いて平絹の台裂を横段に刺繍で色分けし、竜の文様を返し縫いなどで刺繍している。その文様は古墳時代の金工作品と類似性が強く、わが国でも最古級の作品であると考えられる。

I-336-106 連珠円文刺繍（れんじゅえんもんししゅう）

鎖繍によって大型の連珠円文を表した残欠。こうした文様は遠く西アジアに由来するもので、古代における壮大な文化交流を示している。

I-336-108：白地花文氈（しろじかもんせん）

白地の氈（いわゆるフェルト）に藍と縹、赤、淡赤に染めた色氈を嵌め込んで花の文様をあらわした花氈の残欠。

N-319-115：黄地変り鰐文綾幡足残欠

（きじかわりいしだたみもんあやばんそくざんけつ）

平地浮文綾という古様な技法により、鰐風の文様があらわされている。単純な繰り返しによって生まれた光が乱反射するような効果が面白い。

N-319-117-1：赤地鰐文綾幡足残欠

（あかじいしだたみもんあやばんそくざんけつ）

方形の内に縞文様を収めたものと、山道文様（やまみちもんようー山形をつらねたジグザグ文様）を収めたものを互の目に配した綾の幡足残欠。